

内子 The 文楽 2025 “お寺で文楽”

別名「伊予の楠寺」とよばれる本堂ならではの空間で観る人形浄瑠璃文楽
そして、愛媛出身の吉田和生さんと武内陶子さんとの文楽モノ語り

◆文楽実演「傾城阿波の鳴門く順礼歌の段」
あらすじ

今年が生誕三百年の近松半二と複数の作家による合作の本作は、現代の人間関係——親とのすれ違い、会いたくても会えない想い——にも通じる、普遍的な感情が描かれた、文楽初心者にも「わかる」、「感じる」、「泣ける」、演目です。
主家の密命を帯びた十郎兵衛と妻・お弓は、徳島に一人娘を残し、今は大阪・玉造に潜伏しています。親の事情で娘を置いてきたものの、夫婦の胸にはいつも娘・おつるへの想いが消えることはありません。

ある日、お弓の家の門口に、一人の順礼姿の少女が現れます。彼女はおつる——お弓と十郎兵衛の娘。親を探して、はるばる徳島から一人で大阪まで旅してきたのです。おつるは門口で順礼歌をうたい、施しを求めます。家から出てきたのは、母・お弓。話すうちに、お弓はこの少女が自分の娘であると確信します。しかし自分たちは密命を帯びた身、正体を明かすことで娘を巻き込むことを恐れ、名乗ることができません。おつるが懸命に「母に会いたい」と語るたび、お弓の胸は張り裂けそうになります。何度も名乗ろうとするものの、事情がそれを許さず、ついに何も伝えられないまま、おつるは門を後にします。娘の背中を見送りながら、お弓は激しい葛藤に襲われます。しかし、「このままでいいのか？娘を一人で旅させるなんて耐えられない……」と娘の後を追うお弓でした。

太夫、三味線、人形が織りなすドラマチックな四十分——まさに、文楽を初めて観る人にとって最良の入口となる演目です。

◆人形遣いの吉田和生さんよしだかずお（愛媛県西予市出身）に聞く文楽モノ語り

愛媛県大洲市出身のフリーアナウンサー武内陶子さんによる進行で、芝居小屋内子座と人形浄瑠璃文楽とを結びつけてくださった吉田和生さんから、文楽人形にまつわるお話を色々いかがいます。



主催

内子座文楽公演実行委員会、内子町、内子町教育委員会

制作協力

公益財団法人 文楽協会

後援

愛媛県、愛媛県教育委員会、公益財団法人愛媛県市町振興協会、愛媛県指定文化財文楽保存協議会、一般社団法人愛媛県観光物産協会、一般社団法人内子町観光協会、内子町文化協会、内子町文化創造事業実行委員会、NHK 松山放送局、南海放送、テレビ愛媛、あいテレビ、愛媛朝日テレビ、愛媛新聞社、読売新聞松山支局、朝日新聞松山総局、毎日新聞松山支局、日本経済新聞社松山支局、産経新聞社、日本航空株式会社松山支店、アサヒビール株式会社

交通のご案内

○松山自動車道
松山 IC～内子・五十崎 IC 経由
で約 40 分
○JR 松山駅～
JR 内子駅、特急
約 30 分。内子駅
から徒歩約 25 分

